

追悼

故 深川 雅史 先生 ご略歴



昭和33年11月8日 宮崎県に生まれる
昭和58年3月 東京大学医学部卒業
平成2年4月 東京大学医学部附属病院第一内科（黒川清教授）助手
平成4年 バンダービルト大学リサーチフェロー（細胞生物学，循環器学）
平成7年4月 宮内庁侍従職，侍医
平成9年4月 東京通信病院循環器科（腎臓内科）医師
平成11年4月 神戸大学医学部附属病院代謝疾患治療部（腎臓内科）助教授
平成21年4月 東海大学医学部腎内分泌代謝内科教授
令和6年4月 医療法人社団松和会池上総合病院内科顧問
平成14年7月 社団法人日本透析医学会評議員
平成18年6月 社団法人日本透析医学会理事
平成24年9月 一般社団法人日本透析医学会理事
令和6年11月9日 逝去（享年67（没年66歳））

令和6年6月6日 日本透析医学会名誉会員

深川雅史先生を偲んで

東海大学医学部附属八王子病院腎内分泌代謝内科
角田 隆俊

2024年11月9日日本在宅血液透析学会中に悲報が届きました。30年来の師であり友人でもある深川雅史先生の訃報でした。享年67 没年66歳，深川先生の66歳の誕生日翌日でありました。私の携帯にはその10日前，10月30日までの深川先生とのやりとりが残っています。転倒して頭部外傷し前の厚生年金病院に入院したときからその退院日までのやりとりです。

転倒して入院した病院が奥様との出会いの病院であること，東海大学退官後も張り切って動き過ぎたこと，頭痛と吐き気から立ち直りだんだん食欲が出て元気になってきたこと，退院したら何処かの温泉（山梨の石和温泉が候補地だった）での湯治計画，恒例の1月3日の「1年を設計する食事会」までにお酒を飲めるまで回復する予定，最後は駒場大峰先生に残した東海大学医学部腎内分泌代謝内科の地位を高めるにはどうしたら良いかまで，メールに返信すると即座に返信が返ってきたためやりとりをやめられませんでした。退院日が決まったことを伝えられて安心していました。

ところが退院後体調が変わり他の病院に再入院したと聞いて案じていたところの訃報でした。いや，私は「すぐに回復するさ，あのときもそうだった」と考えていました。

深川先生は1983年東京大学を卒業されて故尾形悦郎先生や黒川清先生の薫陶を受けながら自己を確立していきました。バンダービルト大学で松阪泰二先生，安田隆先生，本間利夫先生などと学ばれた後帰国し宮内庁の侍従職/侍医を務められました。その後東京通信病院，神戸大学を経て2009年から東海大学医学部腎内分泌代謝内科教授として赴任し，指導いただきました。

私と深川先生との最初の出会いは1997年東京通信病院に移られた時です。二次性副甲状腺機能亢進症(SHPT)に興味を持ち勉強していたところ副甲状腺ホルモンの当時の新しいアッセイであるHS-PTHの深川先生の冊子を読みました。たかがコマーシャルベースの冊子です。しかし、私にはしみるように理解が深まったのです。上司の飛田美穂先生の紹介をうけ面会させていただきました。当時私は学位修得もすみ今後の進路を考えている時でした。お目にかかったときSHPTの治療法の論文がNephronの再投稿状態だったのでそれも見ていただきました。すると「おしいな」と言うなり昭和大学の秋澤忠男先生に電話してお話した後「よし、Nephronに断りの連絡を入れて」と言うなり定期的な論文指導が始まったのです。毎週木曜日の夕方、靖国に車を止め東京通信病院に通いました。Introductionの役割から参考文献の利用法まで「僕も黒川先生にこうやって教わった」と言いながら大学院生に対するように指導して下さいました。後のKidney Int, Am J Kidney Dis, Clin J Am Soc Nephrol, その他多数の編集委員である深川先生に直接指導していただいた甲斐あって、その論文はAm J Kidney DisにAcceptされました。私にとって宝物のような時間でした。

そう、深川先生は天性の教師だったと思います。福島県立医科大学の風間順一郎教授、名古屋市立大学の濱野高行教授、昭和大学藤が丘病院の小岩文彦教授、岩手医科大学の阿部貴弥教授、日本文理大学の岩崎香子教授、東海大学の駒場教授はもとよりたくさんの方々を育てました。深川先生は東京慈恵会医科大学の重松隆先生、横山啓太郎先生、山本裕康先生らと2000年1月「ROD21」と言う研究会兼教育集団を立ち上げました。ROD21つまり21世紀を迎え腎性骨症という病態を深く考えようと言う主旨の研究会です。ディスカッションの激しい研究発表会のあと食事をします。本番はその後です。銘々飲みたいものを飲みながら泊まりがけで好きなことを朝まで話し合う研究会？でした。時には、罵倒も飛びました。「ROD21」のメンバーに入るためには研究会で口演を行い皆に認めてもらう必要もありました。くたくたに疲れましたが充実感に満たされる会でした。2024年からはCKD-MBD21と名称を変え現在も若手の先生方中心に45回を超え継続されています。「腎と骨代謝研究会」、「腎とビタミンD研究会」と言う歴史のある大きな研究会を1つにまとめ「CKD-MBD学会」に編成したのも深川先生です。

深川先生を語るときに忘れてならないことが慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常の診療ガイドライン作成です。KDIGO Executive Committee Memberであった先生は国際的なガイドラインの作成にも尽力されましたが本領はわが国のガイドラインで発揮されたと感じます。1. 2006年透析患者における二次性副甲状腺機能亢進症治療ガイドライン、2. 2012年慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常の診療ガイドライン、3. 2025年改訂中のガイドラインです。年代が違うため、対象患者の病態も使用可能薬剤や手術法も変化します。しかし、その時々ガイドラインメンバーがそのときの持てる力を出して後の医療者に恥ずかしくないように作成したと思われれます。そうさせたのは深川委員長でした。ガイドライン作成の過程はまるでROD21の乗りのようでした。泊まり込みのガイドライン合宿は正規の会議の後食事し眠たくなるまで資料を出しながらディスカッションする方式でした(写真参照)。

こうやって深川先生を振り返るとエリート学究の人生に感じます。しかし、その裏には壮絶な生き様がありました。2007年の晩夏、副甲状腺摘出術(PTx)を行っている手術室の緊急電話に当時神戸大学の阿部貴弥先生から電話が入りました。彼も動揺しておりいきなり「どうしよう」と言うのです。手術しながら訳を聞くと深川先生が大動脈解離で倒れて発見されたというのです。

緊急手術中だと言うではありませんか。その、瀕死の重傷からも深川先生は立ち上がりました。PTxでご高名な富永芳博先生などと熱海に湯治に行きました。かえってその後の米国腎臓学会、国際腎臓学会のCommittee Memberなど、国際的な活躍に目を見張るものがあります。東海大学に来てからも大動脈解離手術の追加をしています。しばらく、学会時に声の出なかった先生を記憶されている方もいらっしゃると思います。奥様の許可を得てICUで面会したときには医局運営について細かく指示を出され驚きました。深川先生ご夫妻はそれらの大病で得た保険金すべてを神戸大学の心臓血管外科に寄付されておりました。その後も病気をバ

ネにご家族によると「マグロのように」人生（腎生？）に没頭していました。だから、だから今回も大丈夫だと信じていたのです。

深川先生は、倒れる寸前まで何を求めて何をしていたのでしょうか？ 学会の帰り長年深川先生と研究をともにされてきた岩崎先生が頭部打撲する直前のことを教えてくださいました。飛行機に乗る前まで経営学修士（MBA）の勉強に集中していたそうなのです。密かに専門学校にも通っていました。次は、何者になって何をするつもりだったんでしょう？ 坂本龍馬のように前のめりに逝ってしまった感じです。

この追悼文を書ききってしまうと本当の深川先生とのお別れが来るような気がしてまとまりなく書いて参りました。何度言われたことでしょうか「5分以上のプレゼンなんか他人の頭に入らないよ!! 5分で話せるように簡潔にまとめて!!」深川先生がニヤニヤしながら言う叱咤激励の声が聞こえてきました。「こっちだって、感傷に浸る時間が必要なんだ」と言い返したい気持ちです。

深川先生、長い間大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。



2012年慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常の診療ガイドライン作成のための合宿風景（正面左から筆者、横山先生、深川先生、安藤先生、後ろ姿は風間先生、谷口先生でしょうか？）

深夜の時間帯と思われます。くつろいだ姿で深川先生中心にディスカッションをしています。すでに一杯引っかけています。

令和7年1月24日